

## ホラーティウス『諷刺詩集』（2）

松 田 治（訳）

### 凡 例

1. 訳文中の〔 〕は原文にない語句を訳者が補足したことを示す。
2. 訳文中の（ ）内の数字は原文のおよその行数を5行ごとに示したものである。
3. 注記で頻出する人名は繁雑を避けるため次のように略記する。  
Ant.=Antonius, Br.=Brutus, Cic.=Cicero, Enn.=Ennius, Epic.=Epicurus, Hor.=Horatius, Luc.=Lucilius, Maec.=Maecenas, Oct.=Octavianus (後の Aug.=Augustus), Porph.=Porphyrio, Verg.=Vergilius.

### 諷刺詩 1・6

#### マエケーナースとの出会い

マエケーナースさん、かつてエトルーリアの地に住んだリューディア人たち<sup>1)</sup>の中で、あなた以上に高貴な者<sup>2)</sup>はないからといって、また、あなたの母方のご先祖、父方のご先祖がかつて強大な軍勢を指揮した<sup>3)</sup>からといって、多くの人がよくやるように、あなたは、解放奴隷を父にもつ（5）私のような、身分のない者を見くびって鼻であしらったりはしません。

#### Sat. 1・6

- 1) エトルーリア人の祖はリューディア人だったとの説はヘーロドトスが認めていた（1.92）。これは、小アジアのリューディアの人々が、アテュス王の子 Tyrrhenos に導かれてイタリア北部のウンブリアに上陸し、指導者の名から Tyrsenoi と名をもってエトルーリアの祖になったというもの。
- 2) Maec. はアレーティウム（現 Arezzo）のエトルーリア王族の末裔。
- 3) ここに言う legiones はローマの軍団の意味ではなく、アレーティウムの Cilnius 一族が司令官（lucmon）として指揮できた軍勢。

人はどんな父親をもとうと問題ではない、本人が自由身分であればそれでよいとおっしゃるとき、あなたは実に次のことを確信しておられる。

すなわち、身分の低いトゥッリウス<sup>4)</sup>が権力を握って王国を支配する以前にも、しばしば、名のない親をもつ多くの男たちが（10）立派な人間として生きたし、顕職についたこともあったが、これに反して、ウァレリウス<sup>5)</sup>——タルクイニウス・スペルブスを王座からひきずり落として追放した——の子孫であるラエウィーヌス<sup>6)</sup>が、一文以上に評価されたことはない、このことであります。〔ラエウィーヌスは〕あなたもご存じのあの市民が判定者として評価してもこのざまです。

この市民は愚かにも顕職<sup>7)</sup>を（15）しばしば不適当な連中に与え、また愚かにも名声の奴隷となり、肖像やその添え書き<sup>8)</sup>を目の前にして

- 4) これは伝説的なローマ王政時代の第6代王 Servius Tullius のこと。ignobile（身分の低い）というのは、彼が戦争捕虜となった女性 Ocrisia の息子であるということと、父親が誰だったのか不明であるということによる。
- 5) 前509年タルクイニウス一族をローマから追放して、ローマ最初の執政官の一人となった Valerius Poplicola のこと（もう一人は Brutus）。言うまでもなく歴史的に実在したとの保証はない。Tarquinius Superbus は第7代目、すなわち最後の王。この王が追放された時点で王政が終り、共和政になったという。
- 6) Hor. がここで述べていること以外は不明の人物。名門の出身ながら不肖の人物として隠れもない存在だったらしい。
- 7) 執政官、法務官、高級造営官などの上級官職のこと。
- 8) 「記念のため、及び後世のため肖像を展示する権利」（ius imaginis ad memoriam posteritatemque prodendae, Cic. Verr. 5・36）は、高級造営官職に就いたことのある者だけに認められた（Kießling-Heinze, Lejay）。問題の門閥に葬式があるとき、その家の高級造営官を務めた祖先のロウ製の面が展示された。このロウ面の下部にその人物の名前、業績、官職官位などを添え書きしたものが titulus, tituli だった。愚かな大衆は

恍惚となる仕末です。

私たち<sup>9)</sup>はどうすべきなのでしょう、この民衆から遠く遠く離れた私たちは。というのは、かりに民衆がある顯職をたとえばデキウスといった新人<sup>10)</sup>よりはラエウィーヌスに与えても、また監察官 (20) アッピウスが、私の父が自由身分の者ではないとの理由で私を排除して<sup>11)</sup>も、恐らく当然のことですから、なにしろ私は自分の皮の中でじっとしていなかったことになりますので<sup>12)</sup>。しかし、名誉女神は、そのまばゆい戦車に縛りつけて引いていきます、貴族のみか身分の低い男たちをも。

ティルリウス君<sup>13)</sup>、何の役に立ちましたか、脱ぎ捨ててあった幅広の緋の帯〔を縫いつけたトゥニカ<sup>14)</sup>〕を再び身につけ、護民官になるこ

その一門の名声に捕えられ、うっとりとその肖像や説明を眺めるのである。こういう一般市民は、名門の出身でありさえすればどんなに不適格であってもこれに高位高官を与えたがる、というのが Hor. の批判。

- 9) 「私 Hor. のように身分の低い者たち、素姓卑しい者たち」と解したい。すなわち、こういう者の家には、民衆をうっとりさせるような肖像や名聲などないから、いきおい物理的な意味でも「民衆との間に距離ができる。」
- 10) デキウスは P. Decius Mus のこと。一族中初めて執政官になり、前 340 年ローマ軍を救うべく冥府の神々にわが身を捧げたという *devotio* 伝説の主人公。新人は *homo novus* と称され、一族中で初めて高級官僚になる人物のこと。Cic. もその一例。
- 11) アッピウスは Appius Claudius Pulcher のこと。共和政末期の典型的なデマゴーグである Clodius の兄弟。L. Calpurnius Piso と共に前 50 年の監察官。その厳格さは諺にもなるほどで、元老院から歴史家 Salustius を除名し、解放奴隷の子供たち (つまり Hor. と全く同じ身分境涯の人々) も全員除名したことで知られる。ここは、Kiessling-Heinze が指摘するように「[そしてもし私が実際に民衆の気紛れによって官職に就き、同時に元老院に入ったとしたら]という状況を示す文を補って考えなければならない。」
- 12) ローマ市民は名門出の Laevinus を普段は一文以上には評価しないくせに、ある官職を争ってこの Laevinus と新人 Decius が並んだ場合、後者が新人であるがゆえに市民は Laev. に投票するだろう。私の場合も、生まれが生まれだから、元老院から排除され、Decius と同じ扱いを受ける。これがこの一節の Hor. の考えであろう。
- 13) 特定の誰ということは不明。文脈から推して、低い身分もものかは元老院へ榮達し、しかし Censor の査定によってここから除名されたが、護民官に選出されることによって再び院の議席を得た人物としてその名が出されたようである。
- 14) *laticlavus* のこと。これは元老院議員の服装で、騎士階級は幅の狭いものを用いた。護民官は *toga praetexta* (緋の縁帯付き寛衣、16 歳以下の自由身分の子供や高級官僚の服) は着ないが、いったん選挙で元老院議員になるとこの *laticlavus* を着用した。

とが (25)。ねたみが増えたが、それは、もし君が私人だったなら、もっと少なかったはずですよ。

というのも、どこかのばかな奴が、脛の半ばあたりを黒い編み上げ靴<sup>15)</sup>で締めつけ、幅広の緋の帯飾りを胸に垂らしたりすれば、たちまち「あの男は何者だ、父親はどんな人だ」との声が聞こえてくるのです。

パルスと同じ病氣<sup>16)</sup>にかかり、美しいと (30) 思われたがる男は、どこへ行っても、娘たちにすべてを探りたいとの好奇心を植えつけます、顔つきはどうか、ふくらはぎはどうか、足は、歯は、髪はどうか、と。

これと同様に、自分が市民を、都を、帝国を、イタリアを、神々の聖域を守ってやると約束する者<sup>17)</sup>は (35)、父親はどんな人か、母親の身分が低くて不名誉になりはしないかなどと、あらゆる人々をやきもきさせ、探らせずにはおきません。

「シュリア人ダーマの——またはディオニューシオスの——子よ、お前か、市民を岩から突き落とし、あるいは敢えてカドムスに引き渡すのは。<sup>18)</sup>」

「ですが私の同僚ノウィウスは私より一段うしちに座りますよ (40)。あの男は私の父と同じ身分だからです<sup>19)</sup>。」

- 15) この靴は貴族及び元老院議員 (大抵は貴族身分だが中には成り上がりもいた) の特徴となる服装の一部。四本の黒い皮紐を互いに交差させるようにして踝からふくらはぎまで巻き包んだ。
- 16) 魂の病い。Porph. は「このパルスは極めて低劣かつ淫らな生活をしていたので、ウェスタの巫女アエミリアを犯したと言われたほどだ」と説明しているが、しかし Hor. がここで約 80 年も前のスキャンダル (前 115 年頃 3 人の巫女が連座した) の主に言及しているとは思えない。恐らく詩人の同時代人で、放蕩で名高い人物だったと思われる。
- 17) 一人ですべて面倒を見てやるとの言い草で、政治家の約束が万古不易たることを示す好例。
- 18) 身元曖昧な人物 (*ignobilis homo*) が護民官に選ばれた時の大衆の発言。Dama, Dionysius などは典型的な奴隷の名で、シュリア出の奴隷は特に軽侮された。ローマのカピトリウム丘の一角にあったタルペイアの岩と呼ばれた涯から罪人を突き落とす刑罰は古い時代のもので、これは護民官に対する抵抗や攻撃を罰するべく護民官の手で執行された。Cadmus は罪人を磔にしたりする刑執行人。
- 19) 護民官に選ばれた身分の低い人物の返答。自分は解放奴隷の子 (従って Hor. と同様に自由身分) だが、Nov.

「だからといって君は自分のことをパウルスなみだ、メッサラ<sup>20)</sup>なみだと思っているのかい。だけど彼ノウィウスは、200 台の荷車と三つの大規模な葬式がフォルムでぶつかっても、自分の声で角笛やラッパの音を圧倒できるんだよ。少なくともこの点であの男は我々の心を捉えているのさ。」

さて、解放奴隷の父をもつ私のことに話を戻しましょう (45)、誰もが解放奴隷の息子よとののしる私のことに。

マエケーナースさん、今は、私があなたの客分なので悪く言われますが、しかしかつては軍団副官としてローマの一軍団を指揮したことで悪口を言われました<sup>21)</sup>。あれとこれとは別物です。

というのは、誰が私のこの官位をねたんでも

は本人が解放奴隷であるとして、彼我の差を強調している。「一段うしろに座る」という表現からは階級と身分に従って並べられた劇場の座席のイメージが浮かぶ。

20) Paullus も Messalla もローマの名門貴族の例。第3次マケドニア戦争 (171-168 年) の決戦場となったマケドニアのピュドナにおける戦いで敵王ペルセウスを倒して勝った Aemilius Paullus Macedonicus を最後にこの一門は絶滅したが、その家名を、前 50 年の執政官 L. Aemilius Paullus Lepidus が復活させて名のった。これは三頭官 Lepidus の兄弟。

前 263 年の執政官だった Marcus Valerius がシキリアの Messana を征服して以来、この一族 (Valerii Maximi) は Messalla を名のる。Hor. の後援者の一人だった Messalla Corvinus もその一員。彼は小アジア時代の Hor. の同僚で、共和軍の一員としてピリッピイで敗北した後は、Ant. 軍に参加したりしたが、最後に Oct. と握手。但し、死ぬまで共和精神を捨てなかったと伝えられる。正式には Marcus Valerius Messalla Corvinus。

21) Br. の軍でのこと。共和政時代、軍団副官 (tribunus militum) は一軍団につき 6 人ずついた。カエサル軍の軍団では、これは一人の軍団指揮官 (legatus legionis) の配下に置かれた。カエサルより後の Br. の軍団でも同様だったのか、あるいは総司令官 (将軍) 直属だったのか不明。いずれにしろ、詩人も言うように、当時の軍団副官職はなお実際の戦闘指揮担当であって、帝政期におけるような管理事務職ではなかった。そして、おおむね官職 (cursus honorum) をめざす資格を具えた人々に与えられるポストだった。これに就任するための条件の一つに、実戦経験があげられていた。Hor. にこの経験はなかった。まして彼は解放奴隷の子であり、資格不十分なことと、この身分の問題が相乗して、「なんであんな奴が軍団副官になれたのだ」との陰口を招いたらしい。この職につくのに資格不足だったことを詩人自身が認めていたらしいことは、49-50 行の「誰が私のこの官位をねたんでも恐らく尤もなことなのでしょうが」というあたりに表われている。

恐らく尤もなことなのでしょうが、同様にあなたとの友誼までもねたむのは不当だからです (50)。とりわけあなたは、よこしまな野心からほど遠い、立派な人間を選ぶよう注意なさる。あなたの友愛を偶然に獲得したので自分は運が良い、などと私は言うことはできません。

事実、偶然があなたを私の方へお連れしたのではありません。かつて、善良なウェルギリウスが、そのあとウァリウス<sup>22)</sup>が私のことを執り成してくれました (55)。あなたの前に立ったとき、とぎれとぎれに僅かなこととお話し致しました。もの言わぬ羞恥が多弁を禁じましたゆえ。父は名高い人であるとか、私はサテュリオンの<sup>23)</sup>馬に跨って自分の地所を見回るといったことではなく、ありのままの自分をお話ししました。あなたは、いつものように (60)、言葉を惜しんで返事をなさった。私は辞去し、そしてあなたは 9 カ月後に私を呼び出され<sup>24)</sup>、お友だちの仲間に加わるよう命じられました。

私はとても誇りに思います、なにしろ、誠実な者と卑しい者を区別するあなたのお眼鏡にかなったのですから、父親の知名度によってでなく、生き方と至純な心を基準にして区別なさるあなたのお眼鏡に。

さてしかし、私の本性は、おおむねまっすぐで、これを汚す欠点といっても (65) 些細なものが僅かにあるにすぎず (それはあたかも素晴らしい身体に散らばってけなされる痣の如きものです)、そして食欲、いじきたなさ、放蕩とい

22) Varius Rufus. Aug. 時代の詩人 (エレゲイア、叙事詩、悲劇)。Maec., Verg., Hor. らの友人。Hor. はその叙事詩を高く評価する (C. 1.6; Sat 1.10.43)。De morte (叙事詩)、Thyestes (悲劇) などのタイトルだけが伝わる。Plotius Tucca と協力して Verg. 没後その未完の Aeneis を整理、出版した。

23) この語の基語であるギリシャ語 Σατύριον は Tarentum の一地方の古い神話的名称である。従ってこれは「タレントゥムの」というほどの意味。

24) 政治家と詩人が再会するまで長い時間がかかった。これは、Maec. が 38 年、ある外交上の使命でローマを離れていたからだとの説明が可能である。しかし同時に、立派な人物だけを選ぶ Maec. が、詩人の人柄、態度をよく見るために時間をかけた (Kiessling-Heinze, Lejay)、かつて Br. の友人だったという詩人の立場が Maec. に慎重な行動を強いた (Villen.) などの推測もいちがいに否定できない。

ったことで実際に誰も私に後指をさすことはできず、更に手前味噌を申せば、私[の生活]は純潔、無傷であり、その上友人たちに愛されて生きていますが (70)、このようなことはすべて父のおかげでした。

父はちっぽけな土地しかもたない貧乏人でしたが、フラウィウスの学校<sup>25)</sup>へ私を通わせることを潔しとしませんでした。ここは、お偉い百人隊長さんたちを親にもつお偉い若様がた<sup>26)</sup>が左肩に鞆と書板をぶら下げて通い、月の中旬に8アス[の束脩]を納めたところですよ (75)。その代りに父は思いきって子供をローマへ連れて行きました、騎士や元老院議員がその子弟に学ばせる学問<sup>27)</sup>を私に修めさせるために。

私の服装と、付き従う奴隷たちを見た人は、この大群集の中でのことですよ<sup>28)</sup>、このような費用を私が遺産でまかなったと信じたことでしょう (80)。

私のため父みずから、どんな誘惑にも負けない番人となって、あらゆる先生たち<sup>29)</sup>のもとへ通いました。要するに、父は私の純潔——これ

は徳の第一の花です——を守ってくれました、あらゆる恥ずべき行為からだけでなく、ごく些細な恥ずべき疑惑からも。

そして父は、人の非難を恐れる必要はなかったでしょう、他日 (85)、私が、競売人として、または、かつての父自身と同様に、集金人<sup>30)</sup>としてささやかな収入を追い求めたとしても。私自身、文句は言わなかったでしょう。ですからこの父は今もっと誉めても誉めすぎにはなりませんし、もっともっと私に感謝されて当然なのです。

正気である限り私はこの父を不満とすることはありません。またそれゆえ、親が自由身分の高名な人でないのは (90) 自分の落度に非ずと言う人は多いのですが、私はこういう風な弁解はしません。私の言葉も考えもこういう人々のものとはかけ離れています。

じっさい、もし自然の法則が、過ぎ去った人生を、一定の年数が経ってからやり直すこと、および、自分にとって望ましい別の両親を自分の誇りに合わせて (95) 選ぶことを命じたとすれば、私は自分の両親に満足し、束桿や高官椅子<sup>31)</sup>で名誉に輝く人たちを選びはすまい。これは大衆の見立てでは間違いざたですが、あなた

25) Flavius は、Venusia の小学校の経営者であると詩人が伝える以外のことは不明。田舎の学校とはいえ、ここは土地の名士の子供らが通った。子供たちは親の態度をまねて、Hor. を解放奴隷の子と蔑んだ。

26) 「雀百まで」と言うように、この皮肉な口調は幼少期に味わされた屈辱がいかに根深く残ったかを示している。百人隊長 (centurio) はローマ軍の主要な将校で、各軍団に 60 人ずつ。共和政期にはこれは一般兵士の中から選ばれた。従ってここにいう centuriones も一般兵から成り上った連中で、退役後に土地を給付されてやって来たもの。Venusia は、同盟市戦争 (91-89) の時ローマから離反し、Metellus によって攻囲され、スッラ派の戦争植民地の一部となった。ここへ移住してきた古参将校らは、かつての身分が百人隊長にすぎなかったにもかかわらず、本来の住民より上位の存在であるとうぬぼれた。

27) 小学校の初等教育とは違った、Cic. のいう「いつも少年の人格形成に資する諸学」(Pro Arch. 4)、即ちギリシャ語、文法、韻律論、修辞学など。

28) ローマという大都会には多くの人々が集まっている。ここでは初めて見る人を、それがどんな人間であるかと正確に判断するのは困難である。従って服装や付き従う奴隷の数などはその判断を下すための好材料となる。群集は Hor. の一行を見て、Venusia から来たばかりの解放奴隷とその息子と見るよりは、先ずローマのある名門の子弟の行列と思ったであろう。ローマではこれが自然のなりゆきだった。ut は理由を示す。

29) Hor. が実際に名前をあげたため今日でも知られているのは Orbilius Pupillus という教師だけ (Epst. 2. 1. 71)。

30) 競売人 (praeco)、集金人 (coactor) はいずれもローマの商取引になくてはならない存在だった中間業者で、現在のブローカー、仲買人に当る。農商業のあらゆる産物の販売、遺産現金化、奴隷売買など、いずれの場合でも、一人の praeco による競売が通常の販売方法だった。より大規模な競売になると、売り手と大衆の中間に入る仲介者は coactor argentarius と呼ばれ、これは競売後に、売り手が決めておいた金額をこれに支払い (手持ちの金でたてかえるのでこれは銀行家の活動に似る)、自分は買い手から然るべき額を徴収する (cogit)。coactor は praeco と同様に売上げ額から通例 1% の歩合で報酬 (merces) を得る。coactor の活動は、しばしば銀行家 (両替商) のそれに接近するが、他方 praeco は全く無教育な人々の社会を職場にしているので一段低く見られていた。Hor. の父はともかく coactor としてそれなりの社会的地位を得ていたと言えよう。

31) 束桿 (fascis) と高官椅子 (sellae) は高級官僚専用の道具で、その地位の象徴。椅子は執政官、法務官、監察官、高級造官官の使うもの。束桿は命令権を持つ高官、すなわち執政官、法務官、前執政官、前法務官らの付属品で、彼らが公用で出歩く時の先導をする下っ端役人 (lictors) たちが担いだ。柴束とマサカリをひとまとめに縛り、これに長い柄を付けたもの。権力のシンボルだったのでこれが fascisme の語原となった。

でしたら、多分まともなことだと判断なさるでしょう。なにしろ私は力に余る重荷を運ぶこと——私のやりつけないことです——はしたくありませんから。

と申しますのも、ただちに私は更に大きな財産を求め(100)、もっと多くの人々に挨拶しなくてはならず<sup>32)</sup>、田舎や旅に出かけるとき一人にならないように一人ないし二人の供<sup>33)</sup>を連れねばならず、いっそう多くの下男や馬どもを養い、四輪馬車にも乗らねばならないからです。今なら私は尾を切った騾馬に乗り、思い立ったらタレントウムまででも行けます(105)。旅行鞆の重みが騾馬の背を、また乗り手はその脇腹を痛めつけることでしょう。

こんな私をいじきたない、けちん坊と責める人はいやしません。ところがティルリウス君<sup>34)</sup>、君の場合は、ティーブル街道<sup>35)</sup>で法務官たる君に五名の奴隷がついて行くのです、五徳や酒壺を運びながら。

この点で、また他の多くの点で、名声赫々たる元老院議員さん(110)、私は君よりいっそう便利に暮らしています。思いついたらどこへでも私は一人で行きます。野菜や麦の値段をたずね、しばしば、偽り多い大競技場<sup>36)</sup>や暮れなず

むフォルムを徘徊し、八卦見の傍に立ちどまる。そこから私は帰宅するが、そこではニラ、エジプト豆、パン菓子を盛った皿が待っています(115)。食事は三名の召使いが給仕し、白大理石[の食卓]が杓子を添えた二つの盃を支え、その傍に安物の鉢、平皿、小壺、カンパーニア製の食器類<sup>37)</sup>が並びます。そのあと就寝しますが、翌朝起床することやマルシュアースを訪ねる<sup>38)</sup>ことなど気にかかる必要はないのです。マルシュアースは(120)、ノウィウス兄弟<sup>39)</sup>の中の弟の顔に我慢できないと言っています。

第四時まで寝そべり<sup>40)</sup>、そのあと、でたらめに歩くか、あるいは、楽しい思索の糧となる物事を読むなり書くなりしたあと、体にオリーブ油を塗ります<sup>41)</sup>。この油はしかし、あの浅ましいナッタ<sup>42)</sup>が使うような、ランプからくすねたものではありません。しかし、いちだんと激しくなった太陽が疲れた私に浴場へ行くよう(125) 勧める頃、私は三人球戯<sup>43)</sup>をやめ、カン

場外側周辺に露店や安酒屋が開かれ、うさん臭い連中の絶好の隠れ場ともなった。Cic. はキルクスに陣どる占星術師たち(*de circo astrologi, de divin.* 1・132)に言及し、ユウェナリスも魔術師たちのことを語っている(*sortilegi*, 6・583)。夕方になるとこういういかがわしい人種が集まった。それで詩人は「偽り多い」(*fal-lacem*)と言うのである。

32) 午前中の訪問はローマでは確固たる習慣になっていた。身分の高い人が低い人々の訪問を受けた。下心のある者は毎朝何人もの有力者を訪ね歩いた。Hor. は現在一人の人物(Maec.)にだけ挨拶すればよかった。

33) 別荘へ行ったり、遠方へ旅行したりするとき供の者を連れていくのは貴族の生活の一部だった。Hor. にはこの点何の気兼ねも要らない。

34) 24行の同一人物らしい。彼は護民官になることによって *cursus honorum* の足場を固め、出世し、元老院議員になり、法務官になった。

35) この街道はローマのエスキリーナ門から発して東に向い、ティーブル(Tibur)を経てサビーニ山地、そしてアペニン山脈へ入る。ティーブルに至るまでに二度Anio 川を渡る。ティーブルから先は Via Valeria となってアドリア海側に出る。古い法律——第二次三頭政はこれを廃止しなかった——は、法務官が許可なく10日以上もローマを留守にすることを禁じていた。Hor. は気ままに地の果てまでも行ける自分の自由さと、束縛されている Tillius の窮屈さを対照させている。

36) 半円形大競技場(Circus Maximus)はパラティウム丘とアウェンティヌス丘の間にあった。コロッセウム遺跡で見られるように、観客は階段席に座った。外側には2本の柱によるアーチが無数に作られ、このアーチは座席の下部に伸びていた。このアーチの中、及び競技

37) これは上流家庭で使用される銀器ではなく、青銅の食器。ここの「カンパーニアの」は実は「カプアの」の意。Capua は Campania 地方の中心都市であるが、同時に Nola と共に青銅器産業の本場の一つでもあった。

38) 酒袋を担いだシーレーノス(パッコス神の従者)の像の呼称。もとは泉の辺りに立てられた像と考えられ、ギリシャのある町からローマへ運ばれ、前2世紀半ば以降フォルムの法務官席近くに置かれた。この像は、酒袋を奪おうとする者を手を伸ばして阻止する姿をしている。——という訳で、「マルシュアースを訪ねる」とは朝からフォルムに行って仕事に精出すこと。

39) 金貸し兄弟。彼らは、マルシュアース像の向かい側の *tabernae argentariae* で仕事場を持っていた。

40) 古代ローマでは日の出から日没までの時間を12等分し、それぞれを第一時、第二時……第十二時と称した(夜も12等分)。当然各時間(hora)は季節によって長さが違う。第四時は7月1日ではおよそ9時半、元日には10時半頃。

41) 涼しい朝うちに Campus Martius に行き体操をする。ギリシャ人、ローマ人は格闘技などをする時は体に油を塗った。

42) ここに述べられていること以外は不明の人物。

43) もとの形は *lusus trigo*。3人が3角形の頂点に立ち、3個のボールを使って、各人が投げると同時に受け取る、といった遊びだったらしい(H. A. Harris, *Sport in Greece and Rome*, Thames and Hudson, 1972, pp. 90-91)。

プス・マルティウスをあとにします。私の食事は質素です、つまり、一日中すき腹のままです。いなくてすむだけの量を食べ、家で休みます<sup>44)</sup>。

これこそ不幸のもとになる大それた野望から解放された人間の生活です。こういう具合にして、私は、自分の祖父、父、おじが (130) 財務官<sup>45)</sup>だった場合よりもいっそう優雅に生きられると考えて、大いに慰められるのです。

## 諷刺詩 1・7

### ブルートゥスの裁き

追放処分を受けたルピリウス・レックス<sup>1)</sup>の膿と毒に対して混血児ペルシウス<sup>2)</sup>がどういう風に復讐したかということは、思うに目病みや理髪師たち<sup>3)</sup>の間ですっかり知れわたっている。

このペルシウスは裕福で、クラージメナイ<sup>4)</sup>で手広く商いをしていたが、同時にレックスを相手どって面倒な訴訟を起していた (5)。この男<sup>5)</sup>は頑固で、その憎々しさといったらレッ

44) 野心家は自分の *negotia* のため日昼の時間を費さねばならない。これとの対立を述べている。公的生活で無役でいることは並の俗物にとっては一つの不幸である。従って詩人は無為の生活の気楽さをもって慰めとする。

45) 財務官 (*quaestor*) は高級官僚への登龍門で、新人 (*novus homo*) にも元老院への道を開いてくれた官職。  
**Sat. 1・7**

1) *Rupilius Rex* はローマの騎士で、前43年ローマで法務官を務めたが、三頭官 (*Ant., Oct., Lepidus*) によって追放刑に処され、当時小アジアにいた *Br.* を頼っていた。従って *Hor.* は *Br.* の軍でこの人物を知ったことになる。

当時のローマは内乱の最末期、すなわち共和政最末期である。44年3月15日カエサルが *Br.* や *Cassius* らに暗殺されたが、事態は共和政派がもくろんだ通りにはならず、結局彼らはローマを捨てざるをえなくなる。政局はカエサル派と共和政派の確執で混沌状態が続く。先ず *Oct.* が43年8月クーデターによって執政官となり共和政派に対して追放令を発した。ついで11月には第二次三頭政治が成立、ここにテロルが発生し、追放、大殺戮がくりひろげられた。ルピリウスが小アジアに逃れたのはこの時のことである。当時 *Br.* は被追放者の身ながら事実上アジアを支配していた。24行でペルシウスが *Br.* をアジアの太陽 (*solem Asiae*) と呼ぶあたりはこのような実状を如実に反映している。

2) この人物は、名前はローマ風であるが、32行で見るように実はギリシャ人。しかし混血児 (*hybrida*) という語が示すように、小アジアのギリシャ植民市クラージメナイに住んでいたから、ギリシャ人とローマ人の混血だったと考えられる。

3) 病院や床屋には色々な情報が集まる。

4) 小アジア西部のエーゲ海沿岸の港町。

クス<sup>6)</sup>をも凌ぎ、厚顔にして自大、言葉づかいもひどく辛辣で、白い馬<sup>7)</sup>を駆ってシセンナやバウルスのような人たち<sup>8)</sup>を出し抜くほどだった。

レックスに話を戻そう<sup>9)</sup>。二人の間では合意が得られなかった (事実、気むずかしい人々<sup>10)</sup>は一騎討で争う (10) 英雄たちと同じ立場にある。プリアモスの子ヘクトール<sup>11)</sup>と勇猛なアキレウスとの間の敵愾心は致命的なものだったので、究極の死しか二人を引き離せなかったが、それは両者の勇気が最高度のものだったからに他ならない。もし不和女神<sup>12)</sup>が二人の臆病者を駆りたてるか (15)、あるいは、たとえばディオメデースとリュキアのグラウコスのように不釣り合いな者同志の闘い<sup>13)</sup>が生じたら、戦意

5) これはペルシウスのこと。ここで悪しざまに語られる「この男」を、*Lejay* と *Morris* は誤解してレックスのこととしている。従って、9行目の「レックスに話を戻そう」に関する二人の注釈もおかしなものになる。

6) ここのレックスは普通名詞の「王」(*rex*) にかける。共和政期のローマ人にとっては王そのものが嫌悪の対象であるが、憎々しさではその王にも勝る、との含意。

7) 白い馬どもが曳く馬車のこと。白い馬はプラウトゥスによると他の馬より脚が早いとされた (*Asin.* 279)。

8) 二人とも不明の人物、いずれ辛辣な口うるさい人間の典型として、当時のローマ人なら知らぬ者としてない人々だったと思われる。

9) 1行目でレックスの名を出したあと、2-8行でペルシウスのことを語り続けたので、ここで元に戻そうとのこと。従って、6-8行はレックスのことに触れているのだから、ここでレックスに戻そうと言うのは不器用だとする *Lejay*, *Morris* らの解釈は誤解である。不器用との評言はむしろこの直後の記述にこそふさわしい。

10) ここから18行目までのカッコ部分は挿入文であるが、その長さに注目されたい。この挿入は、口やかましく罵り合う二人を、一騎討に生死を賭けるホメーロスの戦士たち (アキレウスとヘクトール) と並べて記述し、どちらの場合も力量が伯仲しているので容易に勝負がつかないとしている。

9行目で「レックスに話を戻そう」と言ったが、次に二人の紛争が長びいたことを述べており、挿入部はこの第二の文章を更に補足説明するためのものである。従ってレックスの話題にはならず、この挿入文は文章技法としてはかなり拙劣な部分と考えられる。

11) プリアモスはトロヤ戦争当時のトロヤ王国の老王。ヘクトールはその長子で、トロヤ軍の総大将。一騎討でアキレウスと闘い敗れた。

12) *Enn.* が叙事詩に導入した戦争の女神 (*Sat.* 1・4・60に類例あり)。ホメーロスのエリス。

13) *Diomedes* も *Glaucos* ホメーロスによって語り伝えられた戦士。II. 6・119以下の一場面の言及。トロヤの戦場で *Diom.* はトロヤ方の *Gl.* と相対するが、名のりを上げているうちに昔から家族同志の交際のあったことが判明し、友好 (つまり不戦) の印として互いの武器を交換しようと *Diom.* が提案する。相手もこれを了承し、

で劣る方が退却するだろう、おまけに贈物までしながら)。そこで、ブルートゥスが総督<sup>14)</sup>として豊かなアジアを支配していたとき、ルピリウスとペルシウスはとっくみ合って闘ったが、その取組みはバッキウスとビトゥス<sup>15)</sup>のそれに劣らず釣合いのとれたものだった。

二人とも(20)えらい鼻息で法廷に進み出る。大した見物だ。ペルシウスは訴えた理由を述べる。法廷に詰めかけた人々がいっせいに笑う。ブルートゥスを讃え、その随員を讃える<sup>16)</sup>。ブルートゥスをアジアの太陽とよび、レックスを除く随員一同を有益な星々となえる。この男[レックス]はシリウス星<sup>17)</sup>として(25)、農夫らに嫌われる星としてやって来たのだ。ペルシウスの言葉は、杣人も滅多に斧を入れない土地を流れる冬の川のように激しかった。

そこでプラエネステの男<sup>18)</sup>は、よどみなく毒舌を吐く相手に、果樹園から飛び出してくるような悪罵で応酬する<sup>19)</sup>。まるで、旅人が大声でしきりに「カッコー」とあざけっても<sup>20)</sup>、これ

を(30)言い負かすことができた、言葉の荒い、不屈のブドウ刈取人である。

しかしあのギリシャ人ペルシウスは、イタリア式毒舌を浴びたあと、次のように叫ぶ。「偉大な神々にかけて、ブルートゥスさん、王族追放という御家芸のあるあなたに<sup>21)</sup>お願いしますが、どうしてこのレックスめの喉を切らないのですか。これは間違いなくあなたのお仕事の一つですよ。」

## 諷刺詩 1・8

### プリアーポスの魔女退治

以前わしは一文にもならないイチジクの木の幹だったが、一人の職人があるとき腰掛けを作ろうか、プリアーポス像<sup>1)</sup>を作ろうかと迷ったあと、わしを神様に仕立てることに決めた。それからというもののわしは神様であり、泥棒や鳥どもを大いに恐がらせている。というのは、泥棒たちをこの右手と、裸の腿の付根に立っている赤い棒<sup>2)</sup>が怯ませ(5)、他方、うるさい鳥どもはといえば、わしの頭の天辺にしっかり結わえられた葦がこいつらを脅し、できたての公園<sup>3)</sup>に居つくの邪魔してやるからである。

までにブドウの刈取りをしなかった農夫を、たまたま通りかかる人がカッコーの声をまねてひやかした、ということを書き留めている(18・66・249)。

- 21) 「あなた」は言うまでもなくこの法廷を主宰している Br. のこと。「御家芸」は遠い過去の事件とごく最近の事件を結びつけている。一つは、この Br. の遠い祖先とされた同じく Brutus という名の人物がローマ王政最後の王 Tarquinius Superbus を追放してローマに共和政をもたらした(前509年)という事件で、もう一つは、権力の絶頂にあって半ば王になりかかったあのカエサルを現代の Br. が倒した事件である。二人の Br. は血脈のつながりがあったと俗信されていたので、語り手は「王族追放の御家芸」を云々した。

#### Sat. 1・8

- 1) プリアーポスは、小アジアの北西部、ダーダネルス海峡に面したギリシャの植民市ランプサコスで崇められていた神。神話ではしばしばディオニューソスとアプロディーテーの子とされた。ローマに移入されて庭園やブドウ畑の監視者となる。この神は自然の豊穡、とりわけ生殖の象徴だったので、美術的に表現される時には男根が顕著な特徴となった。
- 2) 右手には鎌か棍棒を持っていた。「赤い棒」は男根のこと。
- 3) ローマ七丘の一つであるエスキイリーヌ丘に、エスキイリアエと呼ばれる一画があった。その一部は古くから墓地になっていたが、この墓地だった所を Maec. が公

二人は下馬して手を握り合ったが、さて、  
—そのとき再びクロノスの子ゼウスがグラウコスの心を感わしたので、テューデウスの子ディオメデースに対して代りに贈ると、青銅の武具にかえて黄金のものを、九頭の牛に値いするものに百牛の値のものを贈った(6・234-6)。

従ってホメロス本来の場面で見ると、Gl. は Hor. が言うような怯懦、怠慢な人間(pigrior)ではない。滑稽な役まわりで損をしているにすぎない。Gl. はすぐごとと戦場を去るわけではないのだから。

- 14) この総督 praetor は正しくは propraetor であるが、日常会話などでは praetor (本来は「法務官」と短くした形が属州総督の意味で用いられた)。
- 15) 兩人とも Aug. 時代の有名な剣闘士。
- 16) 「法廷に詰めかけた人々」と訳した conventus という語は本来は、属州総督の開催する法廷、この法廷の管轄区域(一世紀のアジアには九つあった)、この域内に定住して一種の組合を形成しているローマ市民団を示した、と Lejay は説明している。  
随員(cohorts)は総督の随員、すなわち彼の幕僚(comites)のことで、一部は軍団指揮官などの公的な身分を持つ人々、一部は総督の友人、親族、上流子弟そして文学者たちで構成されていた。ルピリウスもこの幕僚の一員だったらしい。
- 17) 土用の酷熱期の星。
- 18) ルピリウス・レックスのこと。Praeneste はローマ郊外の町(ローマの東南東約37キロメートル地点)。
- 19) 果樹園(arbustum)はニレやポプラにブドウを這わせて育成するブドウ畑のこと。「果樹園から飛び出してくるような悪罵」というのは、通行人の挑発(嘲笑)に乗って、畑で働いている人が激しく投げ返す罵りのこと。
- 20) 春分までに、すなわちカッコーの声が聞こえ始める頃

昔は、せせこましい住居から放り出された死体を、仲間の奴隷が安物の棺桶に入れてここへ運んだものだ。ここには貧民のための共同墓地があった (10)、あの居候パントラブスや遊び人ノーメンターヌス<sup>4)</sup> のための。そこにある石柱に間口 1000 フィート、奥行き 300 フィートと墓地の広さが指定され<sup>5)</sup>、この墓地が相続人たちの手に渡らないようにしていた<sup>6)</sup>。

今では、健全になったエスクイリアエに住み<sup>7)</sup>、日の当る塁壁の上を散歩することもできる。以前そこで人間どもは (15) 白骨でうす汚れた地面を見て嫌な思いをしたものさ。

今わしが心配し、苦勞しているのは、いつもここを荒らしつけている盗人や野獣などよりも、むしろ呪文や媚薬で人間どもの心を苦しめる女たちのことだ。この連中をわしはどうしてもやっつけられないし (20)、また、さまよう月が美しい顔を見せると同時<sup>8)</sup> にこの女どもが骨や毒草を集めるのを邪魔することもできない。

事実わしはこの目で、黒い<sup>ガウン</sup>長衣をまとったカーニディア<sup>9)</sup> が裸足のさんばら髪で歩いている

園 (horti) に模様がえした。彼はこの広大な公園内部に居宅と邸を構えた。

- 4) Pantolabus は、Porph. によれば、Mallius Verna という人物の仇名。ノーメンターヌス (Cassius Nomentanus) は有名な蕩兒で、7 億セステルティウスもの財産を道楽で食いつぶしたという (Lejay, *Sat.* 1.1.102 の注)。Hor. はよくこの人名を *Sat.* で出している (1.8.11; 2.1.22; 2.3.175 et 224)。スッラ時代の人だったらしい。
- 5) 道路沿いに大理石柱が立てられ、墓地荒らしを防止するため、この柱に限定区域の広さが明示された。
- 6) ここは詩人が H. M. H. N. S. (= Hoc monumentum heredes non sequitur) という定り文句を利用したもの。これは「この墓地は遺産として譲渡するべからず」の意で、要するに墓地荒らし防止用の定り文句。勿論 Hor. は軽く洒落をとばしている。ここに埋められるような人々にはもともと後に残すものなどありはしないから。
- 7) Maec. が手本となって、この新しい居住区が人気を集めた。彼の Horti の他に、Horti Lamiani, H. Palantiani, H. Epaphroditiani, H. Torquatiani, H. Tauriani などができた。
- 8) 満月が出てから魔法使いたちはその術を開始した、ということらしい。オウィディウスはその *Metamorphoses* の中で、女魔術師メーディアが、愛人イアーソンの父アイソンを若返らせる魔術を施すくだりを語っているが (7.179 以下)、そこでは彼女は月が満ちた時にはじめてその術を行う。
- 9) Canidia は当時の女魔術師として詩人がしばしばその

のを見たことがある。サガナ姉妹<sup>10)</sup> の姉の方と、いっしょに吼えておった。顔が青白いので (25) 二人とも見るだに恐ろしかった。

地面を爪で掘り、そして黒っぽい子羊を嚙んで引き裂き始めた。血が穴に注ぎかけられた<sup>11)</sup>。こうして、こいつらに返答してくれるはずの死霊どもを招きよせようというわけだ。

羊毛でできた人形<sup>12)</sup> と、もう一つロウ人形があった。大きいのは (30) 羊毛の方で、これは小さいのを罰するために作られたものだ。このロウ人形の方は哀願者の恰好をしていた、奴隷の受ける罰で今にも死にそうにして。

女の一人はヘカター<sup>13)</sup> の名を叫び、もう一人は残忍なティーシポネー<sup>14)</sup> を呼ぶ。その光景といたら、蛇や地獄の犬どもがうろつき、赤みがかった月は (35)、その場面の目撃者になりにたくないの、大きな墓のうしろに隠れてしまう。そして、もしわしが一言でも嘘をついていたら、鳥どもがわしの頭を白い糞で汚すがいい、また、ユーリウスや、御釜のペディアーティアや、盗人ウォラーヌス<sup>15)</sup> やらがわしに小便や糞

名をあげて攻撃する女性。本篇以外では *Epd.* 5 と 17 の二篇に登場するが、特に *Epd.* 5 ではこの女が一人の子供を生き埋めにするという凄惨な恋愛魔術の有様が述べられている。古註家 Porph. は、カーニディアはナポリの香料売りで、本名は Gratidia といい、魔術をよくし、毒薬を扱っていた、と言っている。これがどの程度に真実なのか知る由もないが、Hor. がカーニディアという名を使って実在の人物を指していたことは疑う余地はない。

- 10) Sagana は *Epd.* 5 でカーニディアの共犯者として言及される女魔術師。
- 11) 地面に穴を掘ってそこに動物の血を注ぎ入れ、死者の霊を招く儀式のことをギリシャ語では *vékora* という。*Od.* 11 巻でオデュッセウスがこれを行う。ここで述べられているのも概略同じ情景。
- 12) 羊毛製の人形は死霊を形にしたもの。これに対してロウ人形は不実な愛人である。羊毛製の人形がロウ人形の方を火をもって追求することになる。
- 13) Hecate はギリシャ神話では三重の性質を持っていたが、ローマでは月及び冥界との関連でしか知られていなかった。魔法使いとしてこの女神は、魔法を行うにまたとない場所である辻を司る。そこに、三体(または三頭)を有する女性の姿をした女神の像が立てられた。
- 14) Tisiphone は殺人者に報復する女神で、三柱の Erinyes の一員。
- 15) ユーリウスは不明な人物。fragilis Pediatia は男に生れていながら生活態度が女性化していたために、かく女性名で呼ばれた人物。男性名なら Pediatius となる。Voranus は、Poph. の伝えによれば、O. Lutatius Catulus の解放奴隷で、ある日両替商のテーブルから金を盗み、これをサンデルの下に隠した。

をひっかけても文句は言うまい。

今更わしが一から十まで述べることもあるまい、サガナと言葉を交していた(40) 亡霊どもがどんなにまがまがしい、かん高い声をひびかせていたか、どのようにして二人の女が狼の毛をマダラ蛇の歯と一緒<sup>16)</sup>にそっと地中に隠したか、またどのようにしてロウ人形に火がついていっそう大きく燃えさかったか、そしてわしが証人として、二人の魔女の声を真近に聞き、仕草を真近に見てどんなに恐い思いをしたかを——その仕返しはしてやったが(45)。

というのは、膀胱が破裂するのと同じほどの音で、イチジクの木であるわしがおならをぶっ放したのだ。そこで奴らは町の方へ一目散さ。カーニディアの入歯が、サガナの大きな鬘が、草が、そして二人の腕から恋魔術用の紐が落ちた。見る者がいたら、どっと大笑いしたことだらう(50)。

### 諷刺詩 1・9

#### コネを求める男

たまたま私は聖道<sup>1)</sup>を歩いていたが、いつものように何かしら詩のことが頭にあって、すっかり考えこんでいた。そこへ私が名前しか知らない一人の男が駆けより、私の手を取って言った。

「やあ、ごきげんいかが。お目にかかれて倅せです。」

「目下のところ上々です。あなたの望みがすべて叶いますように<sup>2)</sup>」と私は答えた(5)。男がぴったりついて来るので「まだ何か御用でも」

16) 乾いた狼の毛と若干の動物の歯は、敵意ある呪文の効能を弱める力があると信じられていた。

#### Sat. 1・9

1) Via sacra はローマ市内の主要街路の一つ。現在でも市内中心部の遺蹟群フォルム・ローマヌムにその一部が残っている。石だたみの道で、この道を歩いて我々はフォルムからコロッセウムに出ることができる。この道路の起点は判っていない。

2) この Hor. の返事は丁重ではあるがひどく月並なもので、儀礼にすぎない。名前でしか知らない相手に話しかけられ、うるさく感じている様子がうかがえる。普通ならこれでお別れになるのだろうが、相手は構わずついてくる。

と先手を打った。ところが彼は「お見知りおき願いたく思いまして、文学をやっております」と言うではないか。それで、「これはお見それしました」と答えた。

無性に逃げたくなった私は足を速めたり、立ちどまったり、また私の召使いの耳に何かささやいたりした。その間、汗が(10) 踵のいちばん下まで流れていた。「ああ、ボーラーヌス<sup>3)</sup>よ、君は短気者ゆえ倅せだよ」と私は心につぶやいたが、くだんの男はあれこれしゃべり、街路や町をたたえていた。

私がうんともすんとも返事をしないので、「あなたはひどく逃げたがっている。とっくに判ってますよ。でも、どうしたって無駄です。いつまでも離しません(15)。ずっとご一緒しますから。さて、ここからどこへ行きますか」と彼は言った。

「あなたが一緒にうろうろなさることはありません。あなたのご存じない人物に会いたいのです。この人はティベリス川を渡ってはるか遠くの、カエサル公園<sup>4)</sup>の近くで病床についているんですよ。」男いわく「私は特に用はないし、怠け者でもない。ずっとお供しましょう。」

私は耳を垂らした……あたかもひどく重い荷を(20) 背負わされて怒ったロバのように。その男が話し始めた。

「もし私の自己認識が正しければ、あなたは私をウィスクスやウェアリウス<sup>5)</sup>に劣らぬ友と評価なさるでしょう。なぜって、誰が私よりも多く、あるいは速く詩を書けるでしょうか<sup>6)</sup>。誰

3) Bolanus は不明な人物。Hor. のような忍耐力を持たなかったことだけは明白である。

4) Caesaris Horti はカエサルが遺言でローマ市民に残した公園で、ヤニクルムの南斜面に半円形に広がり、Via Portuensis まで伸びていた。

5) 騎士 Vibius Viscus には二人の息子がおり、二人とも文学者で、Maec. と Hor. の友人だった。Sat. 1・10・83 で敬意を込めて言及されている。

ウェアリウスについては Sat. 1・6 の注 22 を参照。

6) Hor. をよく知る者——この作品は特に彼の内輪の友人たちを楽しませるために作られている——なら、ここに述べられた三種類の行為(相手のセールスポイント)が、7行目の「文学をやっております」と同様に、極めて滑稽なヘマであることを一読して理解した。(1) Hor. は急速かつ多量の詩作を嫌った(Sat. 1・4・11ff.; 17 f.). (2) ダンスを上品なものとは見ていなかった(Sat. 2・1・24f.). (3) 歌一般及びヘルモゲネースについての意

が私以上に柔らかく体を動かせるでしょうか。それに私の歌はヘルモゲネース<sup>7)</sup>が妬むほどなんです。」(25)。

ここがこいつの言葉を中断する好機だった。

「あなたには、あなたの健康を願ってやまない母君やご親戚はいらっしゃらないんですか。」

「一人もいやしません。みんな吊ってやりましたもの。」

幸運な人たちだ<sup>8)</sup>。残っているのは今や私だけだ。さあ殺せ。それというのもあの悲しい運命が私に迫っているからだ。これはサビーニーのある老婆<sup>9)</sup>が、私の幼い時分に、占い用の壺<sup>10)</sup>をゆすってから予言したものである(30)。

「この子を亡ぼすのは恐ろしい毒でも敵の剣でもなく、肋膜炎でも咳でも、ジワジワきいてくる痛風でもない。ある饒舌な男がいつの日にかこの子をしゃべり殺すであろう。もしこの子が賢ければ、一人前になると同時に、おしゃべりどもを避けるがよからう。」

私たちはウェスタの神殿<sup>11)</sup>に来ていた。すで

見は *Sat.* 1・3・1ff. において明らかである。

7) これは *Sat.* 1・3・3 以下で語られる歌手 *Hermogenes Tigellius Sardus* のこと。この歌手が死亡してからまだ多日を経っていない。この歌手の死という事実を手掛かりにして *Hor.* は相手に「長生きしなくてはいいません、お母様やご親戚の方々のために」切り込んでみる。これには、「病人宅までついて来るのは危険ですよ、生命にかかりますよ」との含みがあるのかも知れない。

8) *Hor.* の一人言の最初の文句。既に死んで、このうるさい男に煩わされずに済む人々の方が自分より幸福だとの意であるが、この *felices!* という悲鳴は、嵐に襲われて死を覚悟したオデュッセウスの愁嘆場に通じる。

——三倍も、いや四倍も倅せだ、とくにトロヤの広野で世を去ったあのダナオイたちは (*Od.*, 5・306-7)。

また *Verg.* の英雄アエネアースも同様の嘆きを見せる (*Aen.* 1・94-96)。 *Hor.* はここでこれらの叙事詩場面を意識してこの *felices!* を使い、滑稽と悲壮をつなぎ合わせておかしみを出そうとしている。

9) サビーニーはローマからそう遠くもない山地であるが、アペニン山脈のどっかかりで、ローマから遠くはないといっても相当草深い地域。現在も立派な道路は通っているが、いかにも山地らしい小村落が点在する。この地方の人々は魔術を使うことで知られていた。

10) いくつもの小金属板に異なる予言を記入し、これを壺に入れておき、利用する時に壺をゆすって一本だけ取出して読む。従ってこの占いは偶然そのもの。この小金属板のことを *sors, sortes* という。

11) この神殿はフォルムの中にあった。円形が特徴で、その一部が今なお残存する。神殿内の炉に、いわばローマ国家の火が年中ともされ、これが消えないようウェスタの巫女たちが見守った。近くに裁判所があり、あとで言及される。

にその日の四分の一が(35)過ぎていた<sup>12)</sup>。そして、この男は、偶然その時刻に法廷へ召喚されていたので、出廷しなければならなかった。さもないと彼は敗訴することになるのだ。

「友だち甲斐にここで暫く私を助けて下さい<sup>13)</sup>」と彼は言った。

「とんでもない、私にじっと立ってるだけの体力があるもんですか。また、私に民法の知識なんかあるもんですか。それに私はあなたもご存じの所へ急がなくては。」

「さてどうしたものか(40)、あなたを諦めるか、訴訟の方か」と彼。

「どうか私を。」

「いや、そうはいかない」と答えて彼は先に歩きだした。私はといえば、強敵を相手に闘うのは辛いことなので、あとに従った。

男は「マエケーナース氏はあなたとはどうですか<sup>14)</sup>」と言って再び話し始めた。「僅かな友人しか相手にしない、しっかりした考えの持ち主なんですね<sup>15)</sup>。あなたほど上手にチャンスをものにした人はいませんよ。ところで、あなたは代役を(45)こなせる立派な助っ人を得ることになるでしょう、もしこの私めを紹介して下

12) 朝の9時か10時頃。

13) 法廷で争う当事者は、実際的に彼のため法廷で闘う弁護人 (*patronus*) の他に、しばしば、知名度や数で彼を応援してくれる人々 (*advocati*) を連れてくるのができた。

14) この男の狙いは *Hor.* に紹介の労を取ってもらって *Maec.* に接近することである。そのために先ず *Hor.* を懐柔するべく図々しく手練手管を試みている。ここでもむろん本題に入り、25行で中断した話の続きを始める。

15) これは *Orelli, Lejay, Morris, Villeneuve, Büchner, Rudd* らと共に図々しい男の発言と考えたい。この男の質問に対して *Hor.* が答えたに於いては、これは答えになっていない。男は *Hor.* と *Maec.* との間柄を訊ねたのであって、決して *Maec.* の人となりを問うたのではない。これを *Hor.* の返事とするには従って無理があるのだが、その無理な点を *Kiessling-Heinze* は「詩人が回避的に返事した」と解している。確かに44行を *Hor.* の発言とすれば、これは下心ある相手の勇気をくじく狙いの発言とも言えようが、我々は、*Villeneuve* も言うように、この答えが質問に対応していないと考える。従ってこれは図々しい男の言葉である。また、このような結構な *Maec.* 賛がこの男の口から出るのはいささかも不自然ではない。この大臣を高く評価することは、同時に目下の「馬」である詩人の心を柔らげることにもなるから。むしろ、そのような眼前の目的があるから相手はこのような賛辞を述べた、と解する方が文章の流れの上でも自然であろう。

さるなら。違ったらこの首を差し上げますが、あなたはもう邪魔な連中をすっかり蹴とばしたんでしょう。」

「私たち<sup>16)</sup>はあそこではあなたが考えるような生活はしてませんよ。あそこほど純粋で、またそのような悪意に縁のない家はありません。はっきり言って、誰か私より裕福な人(50)、または学問の深い人がいるからといって、私は悩みはしません。適材適所ですから。」

「大したお話しですが、殆ど信じられませんね。」

「でもそのとおりですもの。」

「お話を伺ってるうちに、あの方の知遇を得たいとの気持ちがますます募ってきましたよ。」

「それは、もう希望なさるだけで十分です。あなたのその勇気をもってすれば攻略は請け合いです。そして、あの人は征服できる人間です。だからこそ(55)最初はガードを固めるのですけどね<sup>17)</sup>。」

「私は自信があります。贈物で奴隷たちを手なづけよう。たとい今日は閉め出されても、諦めはしません。好機をうかがい、街なかであの方に会い、そのお供をしよう。労少なくして人生の恵みなし<sup>18)</sup>、と言いますからね。」

彼がこうしゃべっていると、突如(60)アリスティウス・フスクス<sup>19)</sup>がやって来た。彼は私の親友で、しかもこの男をよく知っている。私

たちは立ちどまり、「どこへ行ってきたの」、「どこへ行くんだい」と挨拶をかわした。

私は彼の着物をひっぱったり、反応のない腕をつかんだりし始めた。頭をふったり、目くばせしたりした……私を自由の身にしてくれることを願って。だがこのふざけた男は(65)ニヤニヤして知らぬ振りを決めこんでいる。こっちの腹は怒りで煮えくり返っていた。

「確か君は何か僕にそっと話したいことがあると言ってたね。」

「よく覚えてるよ。でも、もっと都合のいい折に話さ。今日は月の第30日で、しかも安息日ときている<sup>20)</sup>。それとも君は割礼を受けたユダヤ人たちをばかにするのかい。」

私は言った、「僕はそんなつまらない迷信に縁はないぜ。」

「ところが僕にはあるのさ。僕は少し気が弱い。その他大勢の一人なんだ。今日は堪忍してくれ、改めて話す折もあるだろうよ。」

こんな不吉な日が私を待っていてくれたとは！ この悪党は逃げ去り、私は庖丁の刃の下にとり残された。

ところが偶然にそこへ例の男の訴訟相手が当人を探しに来て「どこへ行くんだ、この野郎」と大声で(75)叫び、そして「どうか証人になって頂けませんか<sup>21)</sup>」と私に言った。そこで私は耳を差し出す<sup>22)</sup>。その人はくだんの男を法廷へ引いて行く。至るところで呼び声が上がり、八方から人々が駆けよる。こうしてアポローンが私を助けて下さった<sup>23)</sup>(78)。

16) Lejay や Morris も指摘するように、Hor. はここで熱くなつてまじめに語っている。彼が語っているのは、Epic. の説いた真に人間的な友情の絆で結ばれた人たちの集まりである。

17) 相手に対する皮肉に、Maec. に関するジョークを付加する。「Maec. は必ず攻略できる人だ。彼自身その弱みをよく知っている。だからこそ最初は守りを固めるのだ」。Maec. 本人やその仲間がこれを読んで腹を抱えて笑っただろうが、この有難い情報を与えられた相手はこれを真に受けて張り切る。その熱意は次の 56-60 行の発言にうかがえる。

18) Nil sine magno vita labore dedit mortalibus. ギリシャの諺。

19) Aristius Fuscus. 詩人の親友の一人。C.1・22, Epst. 1・10 の二作品がこの人物に献呈されている。また Sat. 1・10・83 では、Hor. が最も高く評価する友人の一人に数えられている。著作については *Aristii Fuscii liber ad Asinium Pollinem* というタイトルだけが伝わっている。このいたづら者是一目で事情を理解したが、即座に、泥沼にはまっている Hor. をそのままにしておいてやろうと決めたのである。

20) ここは Lejay, Villeneuve らによる。月の第30日にユダヤ人は仕事を休んだ。更にアリスティウスは冗談でたまたまこの日が sabbata でもある、つまり二重に有難い日だとしている。

21) 訴訟当事者の一方が出廷しない場合、相手はこれを強制的に判事の前に連れていくことができた。しかしそうする前に、連行する側は、一市民に対して暴力を振ったと告訴されたりしないように、この文句を使って一人の証人を確保しなくてはならなかった。

22) 証人になることを承知した人は同時に自分の耳を相手に向ける。これを求めた人は、証人が覚えていなくてはならないとこのことを確認させるために、証人の耳に触った。

23) 軽快でユーモラスな運びの詩を、神の名によって締めくくるこの一文は、ホメーロスの「だがアポローンは彼(ヘクトール)を救い出した」(II. 20・443)を借りたもの。

# 諷刺詩 1・10

## 再び諷刺詩を論ず

そのとおり、確かに私は、ルーキーリウスの詩がぎくしゃくした歩調で走ると言った<sup>1)</sup>。ルーキーリウスの支持者でこれが判らないほどに能のない人があるだろうか。それでも、この詩人は、多量の塩で都をマッサージしてくれたので、同じ作品<sup>2)</sup>の中で讃えられてもいるのだ。

しかしこの長所は認めても、他のものまでは認めてやれない。そのぶんど (5), ラベリウス<sup>3)</sup> の諷刺喜劇<sup>4)</sup> でさえ美しい詩として讃えねばならないからだ。そういうわけで、笑わせて聴衆の口を開かせるだけでは十分ではないのだ。尤もこれにも長所がなくはないけれど。

思考が滞みなく流れ<sup>5)</sup>, そして疲れた耳にのしかかる言葉によってこの思考が自由を失うことのないようにするには、簡潔さが必要である (10)。

これに加えて必要なのは、時には激烈で、しばしば陽気で、そして時には弁論家や詩人の役割と調和する言葉であり、時には、慎重に力を抑えたり弱めたりする風流人の役割に合う言葉だ。多くの場合、冗談の方が過激な力よりも強

力に、かつ具合よく難題を解決してくれる (15)。

古喜劇を書いたあの人々<sup>6)</sup> は、この点で成功したのであり、この点で手本となるのだ。この人々をあのにやけたヘルモゲネース<sup>7)</sup> は決して読まなかったし、またカルウオスとカトルス<sup>8)</sup> 以外には何ひとつ歌えなかったあの猿<sup>9)</sup> も決して読まなかった。

「だが彼 [ルーキーリウス] はラテン語にギリシャ語を混ぜたのだから (20) 大したもんだよ。」

やれやれ、晩学の皆さん、ぜんたいあなた方は、ロドスのピトレオン<sup>10)</sup> が成し遂げたことを難しくて素晴らしいことだと考えているのか。

「でも、二つの言語がうまく混じり合った文体はいっそう素適じゃないか、ちょうど銘酒ファレルヌムにキオス酒<sup>11)</sup> を混ぜたときのように。」

いったいそれは、お訊ねするが、君が詩作するときのことなのか、または (25), ペティッリウスの難しい訴訟<sup>12)</sup> を君が頑張って勝たせねばならないときのことなのか、どちらですか。

恐らく君は祖国も高祖ラティース<sup>13)</sup> も忘れ

### Sat. 1・10

1) これは Hor. が Sat. 1・4 で Luc. の詩風を批判したことを指す。1・4 を読んだ Luc. びいきの批評家たちが Hor. を批判した。この批判に応答する形で本篇を語り始める。

2) ローマの諸悪にたっぷり塩をかけてこすった、塩をまき広げた。ローマ時代、批判や機知は塩になぞらえられた。同じ作品とは 1・4 のこと。

3) Decimus Laberius, ローマの騎士でマイム (諷刺喜劇) 作家。前 45 年、独裁官カエサルに強要されて、舞台上に立ち、自作を演じさせられた。

4) mimus. 今日のパントマイム (無言劇) ではない。大抵の場合、主題を神話に求めた劇だったが、それにもかかわらず現実的であり、日常生活の低俗な次元におし下げられ、不謹慎な茶番劇になってしまった。ラベリウスと Publius Syrus とが格言や細かな倫理的発言などでこのジャンルを格調あるものになしようと努力したにもかかわらず、その評判は下落したままで、Cic. も Hor. と同様にこれをさして評価しなかったらしい。

5) ここから 15 行まで、Hor. は 1・4・39-61 で既にやったように、再び諷刺詩の性格を論じる。しかしこの議論は、その主目的が Luc. 批判を正当化することにあるから、1・4 ほど一般的ではなく、Luc. が欠いていたとされる特質が言及されるだけである。

6) Hor. は 1・4 の冒頭でアッティカ古喜劇作家としてエウポリス、クラティノス、アリストパネースの名をあげている。ここでもこの人々が詩人の念頭にある。

7) Sat. 1・3・129 と同一人物らしい。1・3 の注 1 を参照。

8) C. Licinius Calvus (82-47) は弁論家、詩人でカトルスの親友。カエサルを中傷する短詩を書いた。

C. Valerius Catullus (87-54 頃) はローマを代表する詩人の一人。カエサルを激しく中傷したことで知られる。そのため、カエサルの甥で養子となった Oct.(Aug.) は彼の作品を全く認めなかった。Hor. の作品に名前が出るのはこれ一回だけ。Hor. の軽蔑は「あの猿」(simius iste) に向けられているが、しかしこのカトルス言及が調子の上で軽蔑的であることは否めない。

9) この言葉は二様に取るべきであろう。①顔の醜さを表現している、②盲目的な模倣者の意味。これは 78, 90 行に出てくるデーメトリウスのことであると、スコリアストらは言っている。

10) 無名に近い短詩詩人 Pitholaus の変名かも知れないとは Morris の推測。

11) カンパーニア地方の Falernum に産する酒は古来名高い。キオス酒はキオス島産のブドウ酒で、ギリシャの甘い、軽い風味が純なファレルヌム酒の味を良くするものと考えられた。

12) Morris によれば、43 年 Petillius という財務官が公金私消で告訴されたが、明白な証拠があるにもかかわらず免訴になった。ここでの言及は、この裁判がひどく評判になったものであり、被告が放免されたのは弁護人たちの腕前が大いに与って力があつたことを示している。

13) Latinus は Verg. によればアエネアースの義父。

て、ペディウス・ポプリコラ<sup>14)</sup>やコルウィーヌス<sup>15)</sup>が汗水たらしてラテン語で弁護活動をしているとき、母国語の中に外国から求めた言葉を混ぜたいのだろうね、二言語併用のカヌシウム<sup>16)</sup>の人々のように (30)。

ところがこの僕はというと、海のこちら側で生まれた人間だが、ギリシャ語で詩を作っていたとき、クイリーヌス神<sup>17)</sup>が、夢が真実である時刻とされる真夜中すぎに現われ、次のような言葉で禁止した。「お前が森に木を運んだとしても<sup>18)</sup>、これは、ギリシャ詩人の大部隊の増員を企てることに比べれば、さほど愚かなことでもない」(35)。

あの大げさなアルピーヌスがメモノーンを殺し、そしてライン河の黄色く汚れた源の出来そこないを作っている間に<sup>19)</sup>、この私は、タルパ<sup>20)</sup>に優劣を判定してもらうため神殿で朗唱さ

れるといったことのない詩を、また、聴衆のアンコールに答えて何度も劇場へ戻るといったことのない詩を楽しんでいる。

悪がしこい娼婦や、老人クレメースをだます(40) ダウス<sup>21)</sup> やらが登場する喜劇を心地よく語れるのは、生きている人々の中では君一人だ、フンダーニウス君<sup>22)</sup>。

ポッリオさんは諸王の事績を短長三步格でお歌いになる<sup>23)</sup>。たくましい叙事詩は意気さかんなウァリウスが作り、他の追隨を許さない。

柔軟さ、優雅さを、田園を愛される詩女神がたがウェルギリウスに与えて下さった<sup>24)</sup> (45)。

この諷刺詩こそは、アタクスのウァロー<sup>25)</sup>や何人もの他の人々が試みたが失敗し、私の方が彼らよりうまく書けるものであった、尤も創始者<sup>26)</sup>は凌げないけれど。また私はあえて奪い取る気もない、多大な名誉をもって彼の頭にのせられた冠を。

しかし私はこの人を泥川である、しばしば残すべきものよりも (50) 取り去るべきものの方を多く運ぶ川だ、と言ったことがある<sup>27)</sup>。さて、お訊ねしたい、学識豊かな君が、偉大なホメロスに文句をつけることは何もないというのか。

愛想のよいルーキーリウスは悲劇詩人アッキウス<sup>28)</sup> [の原文] について変更の必要を全く認めないだろうか。また彼は、エンニウス<sup>29)</sup>の詩

ラティウム人の神話的名祖。

- 14) カエサルの子、Oct. と共に執政官を務めたこともある Q. Pedius の子。この人自身のこと何れも知られていないが、ここでは大法律家の典型として扱われている。
- 15) *Sat.* 1.6.42 のメッサラと同一人物。詩人ティプルス<sup>16)</sup>の友人、Aug. 時代の重要人物の一人で弁論家として卓越していた。彼はギリシャ語からの派生形を排除して純粋なラテン語文体を保つため大いに尽力した。1.6.の注 20 も参照されたい。
- 16) カヌシウム (イタリア南東部、アプーリア地方のアドリア海に近い町) で、またアプーリアでは全般に、ギリシャ語とラテン語 (初期はオスク語) が母語だった。これは、学校でギリシャ語を学ばねばならなかったローマ人には奇異なことだった。また恐らく両言語とも厳密な純粋さは失っていたと思われる。
- 17) ローマ建設者ロームルスが死後神化されてからの名。
- 18) *in silvam ligna ferat*. 「屋上屋を架す」に類する諺風の表現。
- 19) この諷刺的とばかりは当時の読者にはすぐびんと来たらしい。アルピーヌスは M. Furius Bibaculus の変名だとされる。彼はガリアに関する詩を作り、その中の大げさな一行が Hor. によって引用されている (*hibernas cana nive conspuat Alpibus*, *Sat.* 2.5.41)。彼はまたアキレウスによるメモノーン殺しの場を含む叙事詩もものした。その場面はここでは、*iugulat* 「殺す」の二重の意味による地口でもって言及されている。つまり、アキレウスがメモノーンを殺すのであるが、余りの悪文ゆえに作者もメモノーンを殺しているとの皮肉である。
- メモノーンは曙の女神アウローラの子でエチオピア王。おじのトロヤ王プリアモスを助けに来るが、アキレウスとの決闘で薙れる。
- 20) Sp. Maecius Tarpaeus. 55 年ポンペイウスによって、ポンペイウス劇場のこけら落としに上演すべき作品の選定を命じられたことで知られる。多分もっと後で詩作品の評定、検閲の任を与えられたものらしい。

- 21) 娼婦、クレメース、ダウスはいずれも喜劇の典型的な登場人物。プラウトゥスとテレンティウスに見られる最もありふれた筋は、青年の腹心の奴隷 (ダウス) が自分の愛人 (娼婦) の助けを得て、青年の父 (クレメース) を欺くというもの。
- 22) Fundanius は、Hor. が喜劇詩人であると伝えていること以外は不明。 *Sat.* 2.8 でも言及がある。
- 23) ポッリオ (C. Asinius Pollio) は政治家、弁論家、詩人。当時の最も著名な人々の一人。Verg. は牧歌第 4 篇を彼に献呈し、Hor. もその最も素晴らしい抒情詩群の中の一編 (C. 2.1) で彼に呼びかけている。著作はすべて散佚したが、その「内乱史」は有名だった。短長三步格詩は悲劇の会話部分の詩形。
- 24) Verg. はこの頃はまだ牧歌しか発表していなかったらしい。「田園を愛される」云々はこの作品にちなむ表現。
- 25) P. Varro Atacinus. 生地は南部ガリアにある Atax 川にちなんでこう呼ばれた。これは同名の大博学者 Varro と区別するため。
- 26) Luc. のこと。
- 27) *Sat.* 1.4.11 で言ったことを繰り返している。
- 28) L. Accius. 初期悲劇詩人の一人。Luc. と同世代で、Luc. は彼を特に言葉づかいと綴りの点で批判した。
- 29) ローマ文学の父と称される。

にいつもの威厳が少ないとき、これを笑わないだろうか。尤も彼は、けちをつけた人々より自分の方が上だと広言することはないにしても (55)。

そして我々がルーキーリウスの作品を読むとき、ある詩人が六脚韻に一つの意味を封入し、そのことだけで満足して食前に 200 行、食後にも同数の詩行を書いて喜ぶ場合に比べて、よりいっそう磨かれた、よりいっそう流暢な詩をルーキーリウスが生み出さないのは彼自身の才能のせいなのか、彼の主題の粗雑な性格のせいなのかと (60) 我々が探索することを妨げるものがあるだろうか。

エトルーリア出のカッシウス<sup>30)</sup>の、急流よりもお激しい天分は今述べたようなものだったが、噂によると、この人の場合、本箱と彼自身の本が火葬の薪になった。

さて、仮定的に言うが、ルーキーリウスが愛想のよい、洗練された人だったとしよう。彼が (65)、ギリシャ人の知らなかった全く新しい種類の詩を書く人<sup>31)</sup>よりも、また往古の詩人群よりもいっそう文章を彫琢したとしよう。それでも彼は、もし運命によって我々の時代に生まれ落ちたならば、彼は自分の作品から多くを削除し、常軌を逸してずるずる長びく部分をすべて切り捨て、そして詩を作るに当って (70) しょっちゅう頭を掻きむしり、生爪を噛んだであろう。

君はしばしば尖筆<sup>32)</sup>をさかさにして字を消すべきだ、再読に値するものを書くつもりならば。そして大衆の称賛を得るために働くべきではない、少数の読者で満足しなさい。それとも君は、狂気千万にも、そのあたりの学校で自分の詩を読んでもらいたいのか<sup>33)</sup> (75)。

30) 余りにも冗舌多作だったので、死んで火葬に付されたとき、普通の薪は不用で、彼自身の作品と本箱で十分間に合った、というのがここに述べられているエピソード。この話以上のことは知られていない。

31) Morris の解釈による。

32) ロウをひいた書板に字を書く道具。反対側の末端は平たくつぶれた形になっており、ここでロウ面をなぞって字などを消した。

33) 詩を教える時は先生が詩を口誦し、生徒はこれを書き

私はちがう。「あたしは騎士のかたがた<sup>34)</sup>の拍手が頂ければ十分」だもの、野次られたアルブスクラ<sup>35)</sup>が気丈にも他の人々を無視して言い放ったように。

パンティリウスの南京虫野郎が私を悩乱させるだろうか。あるいは、デーメトリウスが私の陰口を言い、ヘルモゲネース・ティゲッリウスの居候であるばかなファンニウス<sup>36)</sup>が私を嘲けるからといって、私は死ぬ思いをさせられるだろうか (80)。

プローティウス<sup>37)</sup>とウァリウス、マエケーナース、ウェルギリウス、そしてウァルギウス<sup>38)</sup>の諸賢が私の詩を認めてくれますように！ 気高いオクターウィウスおよびフスクス、そしてウィスクス兄弟二人<sup>39)</sup>がこれらを称賛してくれますように！

下心などいっさいなしに私は、ポッリオーさん、あなたを名ざすことができます。メッサラさん、あなたをご兄弟と共に、あわせて (85) あなた方を、ビブルスさん、セルウィウスさん、さらに誠実なフルニウス<sup>40)</sup>さんをも名ざすことができます。その他にもあまた立派な学者で友

留めた。オルピリウスはかつて Hor. にリーウィウス・アンドロニクスを教えた (*Epst.* 2・1・70)。そしてユウェナリスの時代になると Verg. と Hor. は既に学校のカリキュラムに入っていた (7・226 f.)。Hor. はむしろこの運命を恐れていたわけではない。ユーモラスに「人気を狙うな」「ベストセラーになろうとするな」と言っているにすぎない。

34) 教養のある階級。

35) Cic. 時代の高名な諷刺喜劇の女役者。

36) パンティリウス、デーメトリウスはいずれも不明な人物。ファンニウスについては *Sat.* 1・4 の注 4 を見られたい。

37) Plotius Tucca はマエケーナース・サロンの一員で詩人、Hor. の文学仲間の一人。ウァリウス・ルフスと協力して Verg. 没後 *Aeneis* を編集、出版したことで知られている。

38) C. Valgius Rufus. エレゲイア詩人で Hor. の友人 (C. 2・9 を献じられている)。

39) Octavius Musa は詩人、歴史家。フスクスについては *Sat.* 1・9 の注 19 を参照されたい。ウィスクス兄弟 (Visci) のうち一人は *Sat.* 1・9・22 に出ている。共に文学者でマエケーナース・サロンに出入りしていた。

40) ビブルスは L. Calpurnius Bibulus のことであろう。アテーナイ時代の Hor. の学友の一人で、カエサルと一緒に執政官を務めた人の息子。セルウィウスは Cic. が何度か言及している Servius Sulpicius Rufus の子らしい。C. Furnius はプルータルコスによれば弁論家だった。

人でもある人々がいて、その名前は割愛するが、それは忘れたからではない。私の詩が、いかなるものであれ、この人々に歓迎されて欲しいものだ。私は苦しむだろう、もしこれが私の期待に背いて諸賢に喜んでもらえないとしたら。

デーメートリウス君、ならびにティゲッリウス君 (90)、諸君は女生徒たちの座席の間で声を絞って詩を読むがいいさ。

さあ、君、行ってきなさい、そして急いでこの作品を私の小冊に書き加えなさい<sup>41)</sup> (92)。

---

41) ここで命令を受けている *puer* は秘書役の若い奴隷。  
「小冊」は諷刺詩集第一巻のことに他ならない。本篇が第一巻のエピローグとして作られたことを示している。